

事務局／旭川市金星町1丁目1-52
☎(0166)22-2361

<http://www.kyoku-shi.com>

ドライマウスについて

旭川医科大学 歯科口腔外科学講座 小神順也・松田光悦

口腔乾燥症は口の中が乾いている状態で最近では「ドライマウス」の名前でよく知られています。唾液には、保湿、抗菌、浄化、消化などの作用があります。そのため唾液が減少すると、粘膜が荒れて痛い、乾いたものが飲み込みづらい症状のほかに齶蝕の多発や味覚異常が起きます。

口腔乾燥症の診断にはまず、実際に唾液が出ていなく乾燥しているかを検査します。一定時間あたりの唾液分泌量を、安静にしている時とガムなどを咬んでいる時とで測定します。また口腔乾燥の所見（舌の表面が赤くつるつるになっている、舌や周りの粘膜の荒れ、口角部のひび割れ）をチェックします。必要により、唾液腺組織の病理組織検査や、血液検査も行います。

口腔乾燥症の原因はひとつではなく、複数の要因が重なっている場合が多いようです。まず、糖尿病、貧血、甲状腺機能亢進症などの全身性の病気によるものがあります。また服用中の薬には、口腔乾燥を引き起こすものがあります。降圧剤、抗ヒスタミン剤、気管支拡張剤、鎮痛剤、睡眠薬、抗うつ薬は口腔乾燥を起こしやすい薬です。ただし病気治療のために必要な薬が多く、かかりつけの医師と相談が必要です。

次に唾液腺自体の障害があります。加齢変化や自己免疫疾患のひとつであるシェーグレン症候群では、唾液腺組織が萎縮します。このため唾液量が減少します。

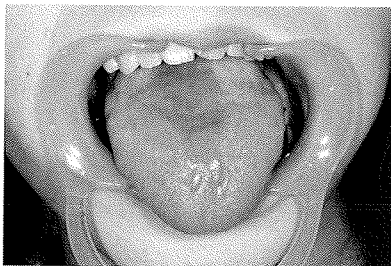
治療法は、対症療法として口腔内の保湿を行います。現在、いろいろな口腔保湿剤が販売されています。液状よりもジェル状のほうが持続時間が長いのですが、味や舌感がそれぞれ違うので、自身に合うのを選ぶのがコツです。一部の方には、漢方薬（白虎加人参湯・麦門冬湯など）が効果的な場合があります。唾液分泌改善薬（サリグレン、サラジェン）は、現在の段階ではシェーグレン症候群あるいは放射線治療に伴う口腔乾燥症のみに処方できます。食事の面では、亜鉛不足も口腔乾燥を引き起こします。食事に、貝のカキ、小魚、わかめ、ごま、レバーなどの亜鉛を多く含む食品を加えるのも効果的です。

一方で、唾液分泌量が十分な場合でも「口が乾く」と訴える方もいます。一部の方はさらに、食欲不振、不眠、集中力の低下などの不調を訴えることもあり、ついには日常生活が辛くなったりします。これは口腔乾燥が、精神症状と重なったケースだと考えられ、うがいや、保湿をしても症状が改善しにくく、「ねばねば」「ぬるぬる」「泡状の唾液」を強く感じる特徴があります。「口が乾く」として受診したが、診察で唾液分泌量が正常だと判断され、ストレスや精神的な影響が原因ではないかと指摘されるようなケースがこれにあてはまります。精神的に緊張した時には交感神経が優位になるので、一時的に唾液量が減少し、ねばねばした唾液になることは確かですが、このようなケースの原因の多くはむしろ感じ方、とらえ方に問題があって、口領域以外の潜在的な不安や不快感をも含めて「口が不快である」と訴えることが多いようです。これを「身体化」といいます。「この症状さえなければ、…が出来るのに」との悪循環が生まれ、日常生活に支障がでることもあります。

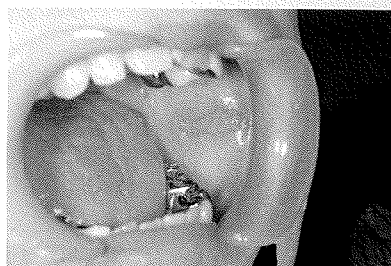
記事の内容については旭川医科大学歯科口腔外科学講座にお問い合わせ下さい。



松田教授



面が赤くつるつるになっている



口内炎が出来やすい